Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-12-22

<あはれ>の自己希求表現 : 『源氏物語』柏木巻を軸として

石山, 貴裕

(Citation)
國文論叢,40:14-28

(Issue Date)
2008-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011626

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011626

〈あはれ〉の自己希求表現

――『源氏物語』柏木巻を軸として――

石山貴裕

一　はじめに――柏木巻の〈あはれ〉

かつて石田穣二が「柏木の生と死に、実は不可解なものや曖昧なものは何一つない。彼は恋に死んだのである」[1]と断言したように、柏木という男の生涯はまさに女三宮との恋を以てその総てとなすだけのエネルギーがあった。玉鬘をめぐる求婚譚においてはほんの端役の一人にすぎなかった彼は、女三宮の降嫁問題においても、結果としては光源氏を娘の降嫁相手として選択した朱雀院の判断材料のひとつとして扱われてしまったかのように見えたが、そこでくすぶらせた情念が、やがて女三宮との思いもかけぬ密通へと彼を突き動かしてゆくことになる。その時に、物語が彼の情念を支える言葉として多用したのが〈あはれ〉という言葉であった。

〈あはれ〉という言葉そのものは『源氏物語』においては千例あまり見受けられるのだが[2]、その意味するところは非常に広く、複雑微妙であることは先学による様々な指摘によっても明らかであろう[3]。その意味の多様さを追究するだけでもひとつの立派な研究になるのであろうが、当稿においては、そのような意味の多様性を追究するのではなく、〈あはれ〉の一側面、具体的には柏木巻を軸とした〈あはれ〉の自己希求表現の分析をとおして、『源氏物語』において、〈あはれ〉という言葉が、それまで描かれてきた人間関係をどのように規定し、新たな方向性を与えてゆくのかということを解明してゆきたい。

柏木が女三宮に対して執拗に〈あはれ〉の一言を希求する場面は、これまでにも様々な論者が指摘するように数多く存在し、ここでもまずはそれらの場面を引用することから始めたい[4]。

（A）まことに、わが心にもいとけしからぬことなれば、け近く、なかなか思ひ乱るることもまさるべきことまでは思ひもよらず、ただ、いとほのかに、御衣のつまばかりを見たてまつりし春の夕の飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまを少しけ近くて見たてまつり、思ふことをも聞こえ知らせてば、一行の御返りなどもや見せたまふ、あはれとや思し知るとぞ思ひける。

（若菜下　4　二二二）

（B）「いとことわりなれど、世に例なきことにもはべらぬを、めづらかに情なき御心ばへならば、いと心憂くて、なかなかひたぶるなる心もこそつきはべれ。あはれとだにのたまはせば、それをうけたまはりてまかでなむ」とよろづに聞こえたまふ。

（若菜下　4　二二五）

（C）「かう、いとつらき御心にうつし心も失せはべりぬ。すこし思ひのどめよと思されば、あはれとだにのたまはせよ」と、おどしきこゆるを、

（若菜下　4　二二八）

（D）誰も千歳の松ならぬ世は、つひにとまるべきにもあらぬを、かく人にもすこしうち偲ばれぬべきほどにて、なげのあはれをもかけたまふべき人あらむをこそは、一つ思ひに燃えぬるしるしにはせめ、……

（柏木　4　二九〇）

（E）「今は限りになりにてはべるありさまは、おのづから聞こしめすやうもはべらんを、いかがなりぬるとだに御耳とどめさせたまはぬも、ことわりなれど、いとうくもはべるかな」など聞こゆるに、いみじうわななけば、思ふこともみな書きさして、

「いまはとて燃える煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまどはむ道の光にもしはべらむ」と聞こえたまふ。

（柏木　4　二九一）

（F）言の葉のつづきもなう、あやしき鳥の跡のやうにて、「行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ

夕はわきてながめさせたまへ。咎めきこえさせたまはむ人目をも、今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」など書き乱りて、心地の苦しさまさりければ、……

（柏木　4　二九六～二九七）

密通以前の（A）の頃から、柏木の死の直前の（F）に至るまで、彼がいかに〈あはれ〉という一言だけを切望していたのかがよくわかる。だが、その心境は一筋縄ではゆかぬほどに複雑なものである。女三宮に思いを告げたい一心で日々に小侍従を責め立てる柏木は、しかし（A）の場面においては、密通などという事態になることなど想定もしておらず、そのように考えていたからこそ、密通が成立してしまった（B）以降の場面において、女三宮が自分に一言も声をかけてくれないことを「ことわり」であると自覚してはいるものの、それでもなお〈あはれ〉の一言を強要する。（C）の場面の「あはれとだにのたまはせよ」は、もはや脅迫以外の何ものでもなかろう。

その後、光源氏に自分と女三宮との密通を知られ、朱雀院御賀の試楽後の宴席の場面で光源氏の「睨み」に接した柏木は、そのまま死出の病床に伏すことになる。彼は相変わらず女三宮に自分が疎まれるのは「ことわり」であり、死後に偲ばれるとしても「すこし」でしかないと思ってはいるものの、それでもいいと言わんばかりに開き直っている。その開き直りの果てに彼が編み出した理屈は、「このままでは、死んでからもこの思いがくすぶっ

たまま、あなたの周りを私の魂が離れないままになってしまうから、そんな私の心をなだめるためにも、〈あはれ〉の一言を私に与えてください」というものであった。

それに続く（E）（F）の場面は、（B）の場面で形成された柏木の理屈を死後の世界にまで敷衍したものである。彼の死がもはや不可避のものとなっているだけに、かえってこれらの理屈は、どこか非論理的でありながらも妙な説得力を伴って作品世界を支配しているように見える。

このように、一見すると彼の論理は〈あはれ〉の自己希求という一点において一貫しているかのようであり、先に引用した石田穣二の言葉にもそれなりの説得力があるが、しかし、本当にそのような一貫性を以て柏木の〈あはれ〉希求の場面を捉えてよいものか、という疑問がここで湧き上がってくる。特定の場面に用いられる言葉が別の場面のそれと同じであるからといって、それらの場面を支える論理までもが同じであると考えることに対して、稿者には少なからぬ疑義が生じるのである。

柏木の物語には、旧来より多くの引歌表現が指摘されており、中でも一条摂政伊尹の「あはれとも言ふべき人は思ほえで身のいたづらになりぬべきかな」という歌が彼の物語には通底しているという鈴木日出男の卓論[5]や、そのような〈あはれ〉希求の歌が「恋歌の一類型」であり、そのような和歌が「ともすれば悲劇的な未来を指し示す」ことを指摘した鈴木宏子による精緻な分析[6]がすでに存在している。また、柏木の人物造型に『竹取物語』の石上中納言の影響を読みとる三枝秀彰の論考[7]や、同じく『竹取物語』で、終末部分の帝の「煙」に対する哀傷を柏木の「煙」に対する執着と重ね合わせた高田祐彦の指摘[8]もあり、『源氏物語』の外部から柏木物語の位相を明らかにする研究は近年になってますます豊かなものになりつつある。今ここでそれらの論究に深く立ち入ることはしない。もちろん、だからといってそのような研究成果を軽視するつもりは全くない。ただ、当稿において、稿者はあくまで『源氏物語』の内部に寄り添った読みを通して、柏木の〈あはれ〉希求の場面の位相を捉えなおしてみたいのである。

以下、数多い柏木の〈あはれ〉希求表現が、一貫しているようで実は微妙な屈折を起こしているということを、『源氏物語』内に存在する〈あはれ〉の自己希求表現を通して分析し、〈あはれ〉という言葉による人間関係形成のメカニズムが物語をどのように形成し、新たな方向へと動かしてゆくのか、その見取り図の一端を作り上げたいというのが稿者の目標である。

二　〈あはれ〉自己希求の系譜

登場人物が他の人物に向かって〈あはれ〉を希求する表現は、『源氏物語』においては柏木以外にも数例用いられている。具体的には、光源氏、夕霧、蔵人少将（夕霧子息）、薫の四名である。

（G）（源氏）「……かくたち帰り、おほやけの御後見仕うまつる喜びなどは、さしも心に深くしまず、かやうなるすきがましき方は、しづめがたうのみはべるを、おぼろけに思ひ忍びたる御後見とは思し知らせたまふらむや。あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」とのたまへば、むつかしうて、御答へもなければ、「さりや。あな心憂」とて、他事に言ひ紛らはしたまひつ。

（薄雲　2　四六〇）

（H）（夕霧）「……なかなか、かの君（稿者注・柏木のこと）は思ひさまして、つひに御あたり離るまじき頼みに思ひ慰めたる気色など見はべるも、いとうらやましくねたきに、あはれとだに思しおけよ」など、こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。

（藤袴　3　三三三）

（I）（源氏）「今はとて思し離れば、まことに御心と厭ひ棄てたまひけると、恥づかしう心憂くなむおぼゆべき。なほあはれと思せ」と聞こえたまへば、（女三宮）「かかるさまの人は、もののあはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとより知らぬことにて、いかがは聞こゆべからむ」とのたまへば、（源氏）「かひなのことや。思し知る方もあらむものを」とばかりのたまひさして、若君を見たてまつりたまふ。

（柏木　4　三二二）

（J）（蔵人少将）「今は限りと思ひはつる命のさすがに悲しきを。あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば、それにかけとどめられて、しばしもながらへやせん」などあるを持て参りて、見れば、姫君二ところうち語らひて、いといたう屈じたまへり。

（竹河　5　八九）

（K）（薫）「……かく濡れ濡れ参りて、いたづらに帰らん愁へを、姫君の御方に聞こえて、あはれとだにのたまはせばなん慰むべき」とのたまへば、……

（橋姫　5　一三七）

（G）は斎宮女御（秋好中宮）のもとを訪れた場面での源氏の言葉である。冷泉帝の寵愛深いみずからの養女に対して、抑えきれぬ恋情を訴えかけるときに〈あはれ〉の自己希求表現があらわれる。表現としては「のたまはせよ」という命令の形をとってはいないものの、その意味する所は〈あはれ〉の強要に他ならない。だからこそ、斎宮女御は返答に窮して閉口してしまうのである。もちろん、源氏とて、彼女が色よい返事をするなどとは思っておらず、その気持ちが「さりや」という言葉や他の話題に言い紛らわす態度に表れているといえよう。その言葉には、恋情をはねつけられた苦々しさも漂うものの、その反面、なにか光源氏の余裕めいたものさえ感じるのである。

（H）の場面は、玉鬘が内大臣（もとの頭中将）の娘であったと発覚したあとの夕霧の言葉である。彼女が実の姉でないと判った夕霧は、かつて彼女に懸想していた柏木（実際のところは彼が玉鬘の実の兄であった）を引き合いに出して、その懸想心を引き受けるべく、彼女に〈あはれ〉を求めるのであるが、物語の語り手はその夕霧の言葉を「かたはらいた」いものとして切り捨てる。玉鬘もまた、引用した場面の直後に「やうやう引き入りつつ、むつかしと思」い、部屋の奥へと引き下がる。若かりし夕霧の直情である。〈あはれ〉を求めるそのエネルギーの青さに、語り手さえ閉口するほどである。

この二つの場面の次に位置するのが柏木の（A）～（F）の場面である。そして、薫の誕生、女三宮の出家、柏木の死を経て、（I）の場面、薫の五十日の祝が描写される。本来なら盛儀たりえる生誕儀礼なのに、尼姿の女三宮がその場の雰囲気を、そして源氏の心を暗く沈ませる。そんな中での、光源氏の未練である。

「なほ」という言葉に、彼の苦渋がありありと浮かぶ。この〈あはれ〉の希求にかつての（G）の場面のような余裕は全く感じられず、その想いは切実ですらある。とはいえ、彼は、おそらくはこんなことを言えば彼女も閉口するに違いない、と思っていたのだろう。実際、〈あはれ〉の自己希求表現は、ことごとく相手の女性を閉口させるものなのである。それは当然といえば当然のことなのかもしれない。だが、ここでの女三宮は閉口することがなかった。彼女は言葉でもって男の〈あはれ〉希求を峻拒する。そして、それゆえに、かえって光源氏の心は手痛く傷つけられることになるのである。「かひなのことや。思し知る方もあらむものを」――柏木とは〈あはれ〉を交わしあったくせに、よくもそんなことが言えたものだ、という彼の呟きは、女三宮に対する痛烈な批判であるとともに、我が身の惨めさを噛みしめる表現にもなっている。

第三部、光源氏死後の世界になると、いよいよ〈あはれ〉の自己希求表現は惨めなものに変容してゆく。玉鬘の娘・大君をめぐる求婚譚に登場する夕霧の息子・蔵人少将は、その思いが叶わぬものとなるを知って、なおも彼女に〈あはれ〉を求めようとする。それが（J）の場面である。だが、この蔵人少将の手紙を受け取った玉鬘大君は、その〈あはれ〉の意味を故意にずらしてしまう。彼は「恋の〈あはれ〉」をかけてほしいと願っていたのに、彼女はその言葉を「あはれてふ常ならぬ世のひと言もいかなる人にかくるものぞは」という歌で――つまり、「人生の無常な〈あはれ〉」として受け流したのである。しかし、その返事を受け取った蔵人少将は、この上もなく感激し、涙を流すのだった。〈あはれ〉の意味が違っているにもかかわらず、である（ただし、その直後、蔵人少将は「誰が名はたたじ」という古今集の歌[9]を引き、「生ける世の死は心にまかせねば聞かでややまむ君がひとこと」という歌を返しており、生きているうちには玉鬘大君が自分に恋の〈あはれ〉をかけてくれることはない、ということは自覚しているといえよう）。

（K）の薫の言葉に至っては、もはや相手にその声さえ届いていない。〈あはれ〉の一言でもかけてくれれば、とは口にするものの、その言葉を宇治の姫君たちに伝えようとしないのである（薫の言葉を姫君たちに伝えに行こうとする宿直人めいた男を彼は「しばしや」と押しとどめ、彼女たちには何も言わずに、そのまま琴の合奏の場面を垣間見しようと考えるのである）。〈あはれ〉の自己希求表現は、ここにおいて完全なる自己完結の世界に封じ込められてしまった。

さて、これらの〈あはれ〉自己希求の系譜をどのように捉えればよいのだろうか。少なくとも、これだけ多様な場面展開を考えると、杓子定規な一貫性をもって解決することは不可能のようにさえ思えてくる。そこで、稿者の考えを述べる前に、まずは先学の諸論稿を確認しておきたい。たとえば、小島繁一は、物語においては、男女の禁忌侵犯が回避された時点で「あはれとだにのたまはせよ」という言葉が表れてくるとして、柏木物語や薫の物語に出てくる同表現を、「交情の困難性」を抱えながらも「それであってもなおかつ可能なかぎり交情を求めつづける物語の方向性とを同時に示すもの」として分析している[10]。しかし、状況として

は確かにその指摘も一理あるとはいえ、この論理ですべてを説明することはやはり難しいことのように思われる。まず、小島の論文は「禁忌」という言葉の意味範囲が広く、何を以て「禁忌」と称するのか、という部分をもっと厳密に詰めて定義しておく必要があるように思われる。そのことに関連するのかもしれないが、さらに、「禁忌侵犯の回避」というのであるならば、そもそも柏木の密通が現実に生じてしまったことは何に起因するのか、といったあたりの説明がうまくつかないようにも感じられるのである〈ただし、光源氏にその密通が露見した後においては、〈あはれ〉の自己希求が小島の述べるような論理に支えられている、ということは十分に考えられるであろう〉。

また、池田和臣は、「女の「あはれ」を求める表現は、源氏物語にあっては、〈かなわぬ恋〉を象徴しているといえるようだ」として[11]、上記の各用例を分析している。たしかに、結果だけを見ればその意見は首肯できるものである。ただし、そこで、物語において〈あはれ〉の自己希求が叶う状況などというものが果たして存在するのだろうか、という単純な疑問を稿者は抱くのである。男に「〈あはれ〉の一言でいいから私にかけてください」と言われて、すぐに〈あはれ〉を与えるような女が物語の表舞台に上がることは、少なくとも稿者には想像がつかない。そのことは、先述した鈴木宏子の論考を証左としても明らかであろう。つまり、恋歌の一類型として、「「あはれ」の希求には、「つれなき人」「年を経てつらし」「わび果つ」「いたづらになる」といったことばが一類のものとして結びついていること、また、このことばはかなわぬ恋に苦しむ者（男）が冷淡な想い人（女）に訴えかけるものである」[12]ことからも、和歌の世界においても、〈あはれ〉の自己希求が報われないことは自明のことなのである。

よって、ここで問題にすべきことはそのようなことではなく、むしろ、〈あはれ〉という言葉がそれまでに物語において描かれてきた人間関係にどのような新たな関係性を付与し、その後の物語を綾なしてゆくのかということであり、そのあり方を場面ごとに精査してゆくことこそ重要なのではないだろうか。一貫した論理を有する言葉として〈あはれ〉を捉えるのではなく、場面ごとに微妙な陰翳をつけながら移り変わってゆく〈あはれ〉の意味をすくい上げ、その中で柏木物語の〈あはれ〉自己希求の意義を検討してゆくこと、これこそが必要なのではないだろうか。

以上に引用した〈あはれ〉の自己希求表現の系譜を簡単にまとめておくと、次のようになる。

（G）光源氏(1)→（H）夕霧　――①第一部
→（A）柏木(1)→（B）（C）柏木(2)　――②若菜下巻
→（D）～（F）柏木(3)→（I）光源氏(2)　――③柏木巻
→（J）蔵人中将→（K）薫　――④第三部

大きく分類するとこのようになるであろうか。なお、柏木(1)は密通直前、(2)は密通直後、(3)は病床の場面である。少なくとも、〈あはれ〉の自己希求表現は①～④のように四段階の微妙な意味の変容を見せているというように稿者は考えている。そのことについて、次に詳しく説明を加えてゆきたい。

三　〈あはれ〉による人間関係規定

ところで、誰かが他の誰かのことを〈あはれ〉だと思ったり、語ったりすることは、その二者のそれまでの関係に新たに特殊な力学が形成されることを意味しうる。かかる力学は、得てして強い立場にいる人間から弱い立場にいる人間に対して向けられることが多い（ただし、この関係の強弱は場面によって異なるであろう。たとえばある場面では立場的なものであったり、経済的なものであったり、精神的なものであったりする、というように）。〈あはれ〉の視線にはそのような力が潜在的に備わっているのである。そのような認識は多くの研究者も無意識に前提としているところであろう。たとえば、「この言葉は男が下位の立場から上位にいる女に「あはれ」を求めるという性格を持つ」と言ったのは小島繁一であり[13]、「動転して口もきけない宮に、なお彼（稿者注・柏木のこと）は高みから自分を見おろす「あはれ」の一言を求め続け」と、三枝秀彰は柏木の立場を低位置に規定する[14]。また、極端なところでは、柏木のそのような言葉を「一人の男が体面や威信等を捨てて、頭を最大限に下げたような恋」の現れであるとして、彼の性格に「幼さ」を読みとる論者[15]もいる。

そのような〈あはれ〉による人間関係の優劣規定は、しかし、常に「優位から劣位へ」という一定の力学を有するというものでもなく、場面によっては立場の弱い人物が強者に対して〈あはれ〉を覚えたりすることもあろうし、お互いにお互いのことを〈あはれ〉であると思うことも、少なからず存在するであろう。ただ、当稿はそのような〈あはれ〉の一側面のみ（つまり自己希求表現）に的を絞って論を進めており、このことに関しては稿者も未だ分析の不足を感じている部分であるゆえ、即断することが出来ず、今後も継続して研究を加えたいところであるが、いずれにせよ、〈あはれ〉という言葉を考えるときには、各場面に即した丁寧な読みが要求されるものであることには変わりないであろう。まして、そのような優劣のベクトルを持ち得る〈あはれ〉を、自らに向けて要求するということは、順当に考えると自身を劣位に規定することにもなるのである。だが、稿者は必ずしもかかる表現が自己を劣位に規定するものとは限らないのではないか、という考えを抱いており、だからこそ、柏木の〈あはれ〉希求の論理を一貫したものとして捉えるべきではない、と感じるのである。

話を戻して、先にまとめた〈あはれ〉自己希求表現の①～④の系譜を、ひとつずつ確認してゆくことにしよう。まず①である。（G）の場面における光源氏は、先の場面で藤壺を喪い、ここでも彼女に対する哀傷の気持ちを引きずっているのではあるが、しかし、今や彼の地位や前途は揺るがぬ栄華に向かって拓かれつつあった。そんな中での、彼の発言である。語り手も「今は、「むげの親ざまにもてなして扱ひきこえたまふ」と揶揄するように、彼の斎宮女御に対する姿勢には、父親としての余裕を超えて、どこかしら王者の余裕さえ感じさせるものがあろう。それほどまでに、光源氏は彼女に対して絶対的な優位の立場にあるのだ。そのように考えるとき、「あはれとだにのたまはせずは」という言葉によって彼が斎宮女御との間に新たに付加したベクトルは、決して自己を劣位に置くような方向ではなかったと考えるのが自然ではないだろうか。もちろん、冷泉帝の寵愛も深い上に、彼女には手

を出すなという六条御息所の遺言もあるわけで、そんな彼女と関係を持とうなどとは、源氏も本気では考えていなかったであろう。だが、この場面での源氏はあくまでも本気である。本気で彼女に口説きかかっている。ただし、本気で口説いてはいるが、その想いが叶ってしまったら、それはそれで問題になってしまうこともあろう。だから、想いを伝えつつも、彼女を閉口させることがどうしても必要なのである。そこで登場するのが光源氏による〈あはれ〉の自己希求表現だった。もしここで自分がこんなことを言ったら、きっと彼女は何も答えられまい、それを承知での彼の科白なのである。この時点においては既にあらゆる点において斎宮女御よりも優位に立つ光源氏の、その王者の余裕を楯に取ったような〈あはれ〉強要の威力を感じ取る必要がある。ここでの〈あはれ〉は、卑下などにより自己を劣位に規定するものではなく、あくまでも従来から存在した自己の優位性を再確認し、強化するための〈あはれ〉なのである。

では、（H）の夕霧の場面はどうだろうか。時に夕霧、十六歳。宰相中将にも昇進し、順調な人生を歩みつつある若さ盛りの青年である。玉鬘との血のつながりがないことを知った彼は、藤袴の花にかこつけて、その俄なる恋情を訴えかける。義理の父である光源氏にも妖しく言い寄られ、今はその息子にまでも恋情を訴えられ、しかも、尚侍として入内することを迫られている（つまり、かつての斎宮女御である秋好中宮や、内大臣の娘である弘徽殿女御と寵愛を争う立場になることを迫られている）状況下で、玉鬘は苦悩している。すべてのベクトルは、やはりここでも最初から玉鬘をして劣位たらしめているのである。彼女はどの道も選べない状況にある。夕霧は、そんな彼女の置かれている立場を知りながら、新たに〈あはれ〉を彼女に求めてゆく。しかも、そのやり方は、かつての柏木による彼女への懸想を言い訳にして自己の懸想心を正当化してゆくという、非常にしたたかなものである。とはいえ、ここでの夕霧の言葉にかつての光源氏のような王者の余裕を見出すことは難しい。彼は何らかの理由で相手を閉口させようとして〈あはれ〉を希求したのではないし、そんな必要性はそもそも彼には存在していないだろう。つまり、彼はあくまでも真面目に〈あはれ〉を希求しているのである。だが、結果として、そのような彼の直情さは苦悩する玉鬘をさらに黙らせてしまうのであった。あらゆる方向から立場的に追いつめられている（＝劣位に置かれている）玉鬘の気持ちを十分に忖度し得ない夕霧の青さを、物語の語り手がなぜ「かたはらいた」いものであると非難するのか、それは、彼が自分の立場（＝玉鬘に対する自己の絶対的とも言いうる優位性）に気付かぬままに、彼女をいたずらに閉口させるような言葉を口にしたからである。彼もまた、形は違えど〈あはれ〉を絶対的優位の立場から強要したのであり、それは決して自己を卑下する表現たりえていないのである。すなわち、①における〈あはれ〉の自己希求表現は、もとより優位の側に立つ人間の優位性をその言葉によって再確認し、その優劣のベクトルをさらに強化してゆくものとして機能していると考えられるであろう。このような〈あはれ〉のあり方はどこか逆説的でもあるが、〈あはれ〉の意味の多様性を分析するときには何らかの重要な視座を与えることができるのではないか、と稿者は考えている。

かかる〈あはれ〉のあり方を確認した上で、次に②における

〈あはれ〉の自己希求表現を見てゆくと、若菜下巻での柏木の〈あはれ〉希求が、一概に劣位の立場からなされたものではないということがおぼろげながらに見えてはこないだろうか。とりわけ、（A）の場面での柏木の心中表現をここで繊細に読み解いてゆくことが必要とされるであろう。女三宮の降嫁を結果的に許されなかった柏木は、女二宮（＝落葉宮）の降嫁こそ許されるものの、しかし依然女三宮のことを諦めきれずに、小侍従を通じて彼女との接触を図ろうとする。降嫁が許されなかった時点で彼は女三宮に対しては明確な劣位に置かれるのであり、それが柏木と女三宮の関係の基調をなしていることは改めて言うまでもない。彼の〈あはれ〉希求の情念は、「まことに、わが心にもいとけしからぬことなれば」という彼自身による但し書きがつくように、あくまでも「女三宮＝優位、柏木＝劣位」という構造を前提としつつも、具体的な行動（というよりは、小侍従の手引きと言うべきか）によって、少しずつ前へと押し進められてゆく。もとより劣位にある自分に対して、優位にある女性が〈あはれ〉をかけてくれることを期待して――このこと自体は従来の典型的な〈あはれ〉自己希求表現の解釈と一致するといえよう――彼は危ない橋を渡り始めるのである。

当稿冒頭のあたりで軽く触れたが、この時、彼は「け近く、なかなか思ひ乱るることもまさるべきことまでは思ひもよらず」とあるように、少なくとも女三宮との密通の可能性をあまり真剣に考えていなかったのだが、しかし、結果的に彼は女三宮の「御ありさまを少しけ近くて見たてまつ」る、その距離の取り方を誤ってしまったのである。〈あはれ〉の自己希求が、実際に関係を持ってしまうことによって、あくまでも女三宮に対しては劣位の状態にあり、叶うべくもない〈あはれ〉希求を期待の次元に留めておこうとした柏木の論理を突き崩してしまった、とも言えるであろう。（A）の場面での〈あはれ〉自己希求は、もとから存在していた柏木の女三宮に対する劣位性を追認するものでありながら、一方で彼の持つ劣位性を破壊しうる（つまり、女三宮との密通を可能たらしめ、二人の優劣を逆転せしめるだけの）エネルギーを内包していたという点において、複雑な要素を孕んでいるのではないだろうか。

そして、現実に密通が起こってしまうと、彼の女三宮への〈あはれ〉希求は、一転して「優位の者による強要」の色調をにわかに帯び始めるのである。密通によって、一時的に二人の優劣は逆転する。（B）（C）の場面はそのような緊迫した状況下にある。そのことをまずおさえておく必要がある。そして、このあたりの柏木の言葉の中には、今までと同じく自己を卑下する表現もたしかに含まれているが、それ以上に、〈あはれ〉を求める彼の科白の論理が、相手に有無を言わせぬ強引さを有していることに稿者は注目したい。つまり、このような密通は「世に例なきこと」でもないのだから、あなたが「めづらかに情なき御心ばへ」のままであるならば、「いと心憂くて」かえって私の中に「ひたぶるなる心」が芽生えて大変なことになりますよ、だから「あはれとだにのたまはせば」その言葉を受け取って退出することにしましょう、という理屈の立て方ひとつを見ても、その強引さは簡単に看取できるであろう。その上、彼は女三宮の許を去る間際に、もう一度「あはれとだにのたまはせよ」と「おどしきこゆる」のであ

る。この一晩に限って、彼は優位の立場に置かれ、その優位の立場から女に対して〈あはれ〉を強要してゆく。しかし、ここで忘れてはならないのは、そのような状況においても、女三宮からひとつの言葉さえ得ることの出来ない柏木が、次のように慨嘆する表現である。

（L）「いかがはしはべるべき。いみじく憎ませたまへば、また聞こえさせむこともありがたきを、ただ一言御声を聞かせたまへ」と、よろづに聞こえ悩ますも、うるさくわびしくて、もののさらに言はれたまはねば、「はてはては、むくつけくこそなりはべりぬれ。またかかるやうはあらじ」と、いとうしと思ひきこえて、「さらば不用なめり。身をいたづらにやはなしはてぬ。いと棄てがたきによりてこそ、かくまでもはべれ、今宵に限りはべりなむもいみじくなむ。……」

（若菜下　4　二二七）

①と比較してみればすぐに判ることだが、優位の者による〈あはれ〉の強要は、基本的に劣位にある女の言葉を封じてしまうものなのである。光源氏はそのことを十分に承知していただろうし、そのことに気付いていなかった夕霧であっても、玉鬘の閉口に際して「いといたくうち嘆きて」座を立った、という程度の嘆き方しかしなかった。ところが、この場面の柏木の考え方は非常に深刻なものである。〈あはれ〉を得られないようなこの身であるならば、いっそ死んでしまおうか、というように、女三宮の閉口が、論理の飛躍によって自己の死と結びついてしまっているのである。そのような考え方は、実事が生じたことによって柏木が優位の立場に転じてもなお、彼の心の底にみずからの劣位性が深く根を張っていることに起因するとも考えられるが、稿者はこの場面が持つ意味をもう少し大きな視点から捉えたいと思っている。そのことに関しては後述するが、いずれにせよ、②において、〈あはれ〉の自己希求表現は、劣位にある人間が〈あはれ〉を希求することによって、その劣位性を追認しつつも、表現そのものにその優劣関係を逆転せしめる可能性を孕んでおり、その可能性は柏木物語においては現実のものとなったのである。そして、一度優劣が逆転すると、〈あはれ〉の自己希求は①のような性質をにわかに帯び始めるのだ、と考えられる。この〈あはれ〉自己希求が潜在的に持っている、優劣逆転を可能たらしめるエネルギーこそ、柏木物語の〈あはれ〉を捉える上での大きなポイントとなってくるものであろう。

続いて③における〈あはれ〉の自己希求表現を見てゆくが、②において一夜限りの優劣の逆転に成功してしまった柏木も、光源氏にその密通が露見することにより、一気に破滅への坂道を下ることになってしまう。柏木と女三宮の逆転は、まさに「一夜限り」の逆転でしかなかったのである。光源氏からの譴責を怖れる女三宮は柏木のことをいっそう拒絶し、柏木もまた、光源氏の言動に過剰な怖れを抱くようになり、その怖れがやがて彼を死に追いやってゆく。もはや柏木は何一つ優位たりえない。彼の劣位性はここにいたって決定的なものとなったのである。よって、ここでの〈あはれ〉の自己希求表現は、②の（A）の場面と同じく、劣位にある者が優位にある者に向かって〈あはれ〉を求めてゆくという構造を取っており、その意味では、劣位の人物が自己の劣位性を追認するものとして機能していると考えられる。ただし、

ここにかつてのような優劣逆転のエネルギーが孕まれているとは言えないだろう。そして、そのエネルギーを封印するものこそ、物語に約束された柏木の死に他ならないのである。

（D）（E）（F）の場面における病床の柏木は、もはや回復の見込みもなく、それゆえに、女三宮と再び対面する可能性さえ皆無となってしまっている。優劣逆転の可能性は、彼自身の「死」によってその進路を完全に絶たれているのであった。だからこそ、柏木は死ななければならなかったのではないか。彼がそのまま長らえていれば、物語は何を描くことになるのか、言うまでもなく、〈あはれ〉を迫り続ける柏木の姿と、その〈あはれ〉に時に屈してしまう女三宮の弱さと、その二人の関係を許さじと思いつつも、醜聞を怖れて大きく責め立てることもできない光源氏の哀れな姿と、それ以外に何があるというのだろうか。優劣逆転の可能性を残しているままでは、物語はどこまでも閉じない。柏木物語にけりをつけるためには、その可能性を何らかの方法で封じてしまわなければならなかった。そのように考えると、先の（L）の場面においてすでに予感されていた彼の死が大きな意味を持っていたということに思い当たるのである。論理の飛躍によってみずからの死の予感を引き寄せた柏木は、その予感に縛られてゆくことになり、そのことによって、〈あはれ〉が蔵する大きなエネルギーをその手で封じてしまった。物語は柏木に一度限りの優劣逆転しか許そうとはしない。だからこそ、あの一夜の柏木の優位の程は他の場面に比べて際立つのである。そして、そこで描かれた死への論理の飛躍もまた、柏木物語の〈あはれ〉を考える上では、ひとつの転換点として見逃すわけにはいかないのである。

実際、あの密通の一晩だけ強者でありえた柏木は、今その病床の中で、すべての存在をはるかな高みに措定しながら、みずからその身を、かつてのような優劣逆転の力を失った〈あはれ〉の深淵に沈めようとしている（逆転の可能性がない以上、劣位にある彼はまさに劣位の沼に沈んでゆくほかないのである）。とはいえ、彼の死に際しての思考は複雑ながらもじつにしたたかなものである。このようになってしまったのはすべて自分の情念が引き起こした行動のせいであり、このまま無理に生きながらえても、かえって余計な不名誉を生じさせてしまうかもしれず、それは自分のためにも、あの女三宮のためにもならないのだから、少しは〈あはれ〉と思ってくれるかもしれない今のうちに死んでしまったほうが、おのれの恋情の一途さの証明にもなろうし、光源氏も死ぬとあっては自分のことを許してくれるに違いない、すべてのあやまちは死によって帳消しになるものなのだ、それに、そうなったら、あの人も日頃は自分をかわいがってくれたことを思い出して〈あはれ〉だと思ってくれるに違いない、と。少しでも自分を〈あはれ〉と思ってくれる人がいるうちに死んでしまおうと考える、その開き直りにも似た倒錯的なしたたかさは、面白いことに、〈あはれ〉の持つエネルギーを封印することになった原因でもある「死」そのものをこそ言い訳にすることで成立しているのである。そして、そのような状況下でなおも女三宮に向かって執拗に〈あはれ〉を求める柏木の姿勢は、決定的になってしまった自らの劣位性を優位の側の人間に改めて認めてもらおうという自己卑下のスタンスを取りながらも、結果としてやはり女三宮を閉口させてしまっているという点になおも注目する必要がある。

女三宮が口を閉ざすのは、光源氏に対する畏れであり、何よりも彼女が柏木とのあやまちに「思ひ懲り」ているからなのであるが、しかし、それ以上に重要なのは、死を楯に取った柏木の言葉が、あまりに切実すぎたことなのである。その切実さは、ともすれば相手の心情など勘案もしない、非常にわがままな論理を形成してしまっている。柏木巻冒頭の彼のしたたかな思考回路は、よくよく眺めてみると、光源氏や女三宮が実際にどのようなことを考えているのか、そのことに全く考えが及んではいない。相手の心情を推察することもなく、彼はひたすら自分を劣位の中心であると捉え、そのような可哀想な自分に対して、〈あはれ〉の言葉をかけてやってください、と、優位の者（と彼が勝手に思いこんでいる人間）に対して〈あはれ〉を希求してゆくのであった。そのような彼の姿勢に対して、女三宮がついに返した言葉は、このようなものであった。

（M）「心苦しう聞きながら、いかでかは。ただ推しはかり。残らむ、とあるは、

立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるる煙くらべに

後るべうやは」とばかりあるを、あはれにかたじけなしと思ふ。（柏木　4　二九六）

「残らむ、とあるは」は先に挙げた（E）の場面の柏木の歌を指す。女三宮は、的確に彼の立てた理屈のわがままな部分を見抜いているのである。「後るべうやは」――私だってこれ以上生きていられそうにないのに、あなたひとりで勝手な理屈を並べないで頂戴、という女三宮の声が聞こえてきそうな反語表現であろう。彼女もまた、ある意味ではこの事件の被害者なのであり、光源氏のことを畏れねばならなくなったという点において、劣位に位置する人間なのである。彼女は絶対的な優位の人間でも何でもない。柏木の思考回路においてのみ、彼女は優位にあるのだ。もちろん、先述したように、彼の劣位性がもはや決定的なものとなっているのは間違いない。そして、〈あはれ〉の自己希求が、自己の劣位性を追認する機能を有することも、一面においては正しいと言えよう。しかし、その決定的な劣位性は彼の死を前提にしなければ成立しないのである。彼がここで死ななければ、物語の展開上先に死ぬのは光源氏になっていたはずであり（年齢的にもそうであろう）、そうなってしまえば、柏木のほうが光源氏よりも優位に立つことだって物語としてはありえたのである。ただ、物語はそのようには筆を運ぶことがなかった。柏木はここで死に、そのことによって、彼の劣位性を必然的であるかのように装ってゆく。だが、女三宮が看破するように、彼の劣位性はじつは非常に主観的なものなのである。よって、ここで〈あはれ〉を自己希求することは、劣位性の追認というよりは、むしろみずからの身をあくまで主観的に劣位へと規定する力学に支えられているのだと言うべきなのかもしれない。〈あはれ〉を求める病床の彼の思考回路や言葉も主観的であるならば、〈あはれ〉も何も言っておらず、むしろ柏木の独りよがりな言い分を非難しているようにも取れる女三宮の返答を、それにもかかわらず「あはれにかたじけなし」と思って受け取る柏木の態度もまた、非常に主観的なものだとは言えないだろうか。

ところで、③における柏木の主観的な劣位規定の構造を今ここで述べてきたわけだが、実際に、柏木にとっては優位に位置した女三宮も、光源氏に対しては、彼の譴責を怖れなければならなかったという意味においては劣位の位置にあったのである。そのように見てゆくと、絶対的な優位性が光源氏に帰着するかのようにも思えるのだが、しかし、ことはそう簡単には運ばない。なぜなら、光源氏もまた、自分を裏切った柏木と女三宮に対して、劣位の情を抱いているからである。彼も決して絶対的な優位の人間ではないのであった。そのことがよく表れているのが（I）の場面である。ここは先の（G）の場面と比較してみると、その違いが鮮明に浮かび上がってくる。既に詳述しているので繰り返さないが、少しだけ補足しておくと、彼はふたりが密通の際に〈あはれ〉を交わしあったというふうに誤解している。実際はそのようなことはなかったのに（もちろん、密通自体はあったのだが、女三宮は決して柏木に〈あはれ〉という言葉を返すことはなかった）、かかる一方的な誤解が、彼をして〈あはれ〉を希求せしめる事態を引き起こすことになったのである。老いた自分を置き去りにして、よくも情を交わしあったものよ、という老残の惨めさを、その瞋恚の炎を、彼は一方的に女三宮にぶつけてゆくのだ。そこに女三宮を思いやる気持ちはみじんもない。光源氏が自己の劣位の情を抱く思考回路もまた、非常に主観的なものなのである。つまり、③での〈あはれ〉の自己希求表現は、どこまでも主観的な自己の劣位を規定するものでしかなくなっているのだ。交情の可能性は主観の世界に閉じこもることによって徹底的に排除されている。それこそ、かつて野村精一が「悲劇的」と称した[16]人間関係の構造なのであろう。

そして、かかる悲劇性は、第三部の④の世界になると、悲劇にさえならないところまで頽落してしまう。（J）の蔵人少将の〈あはれ〉はその意味をずらされ、（K）の薫の〈あはれ〉は相手の耳にさえ届いていないこと、既に指摘した通りである。そこにはもはや人間関係の優劣を規定する力も何も存在していない。——こうして、〈あはれ〉の自己希求は、それぞれの場面に支えられながら複雑な意味内容の変遷を経て、新たな関係性を形成し得ないような、深淵の世界にまで到達してしまったのである。

四　おわりに——柏木の〈あはれ〉の行方

以上、『源氏物語』における〈あはれ〉の自己希求表現を、それぞれの場面に即して細かく分析してみたが、その意味内容は場面ごとに異なった論理を有しており、そのことから、柏木を特徴づける〈あはれ〉の論理が、言葉の上では一貫していながらも厳密には少しずつその質を変容させながら展開してゆくことを、微力ながらも確認できたのではないかと思う。もちろん、〈あはれ〉という言葉自体は何も自己希求表現にばかりあらわれるものでもなく、その他膨大な〈あはれ〉のそれぞれに対して、人間関係規定のメカニズムを探ってゆく必要もあるだろうし、この論考そのものが一貫した論理を追究する方向とは違った目標を思考していることもあり、どうしても理論そのものが繁雑にならざるを得ないという問題も持ち合わせているのであるが、ここで稿者が目指したものは、物語内の特定の言葉（当稿では〈あはれ〉の自己希求表現に着目した）による人間関係構造の形成理論の足がか

りを作ることであり、山積する問題はこれからも引き続き考察を加える次第である。

「あはれとだにのたまはせよ」という柏木の〈あはれ〉希求は、周知の通り、柏木巻の巻末あたりで、人々の手によって叶えられる――「あはれ、衛門督」という人々の声によって。そして、それらの声に混じって、光源氏もまた、彼に〈あはれ〉の言葉を投げかけるのであった。それは、奇しくも柏木が死の床で想像していた通りのことであり、彼は、まさに自らの死に代えて〈あはれ〉を手にしたのである。

……しかし、彼が本当に手に入れたかったものは一体何だったのだろうか。稿者はそのことを考えると、胸が疼くようなやるせなさを感じるのである。彼は女三宮に恋をし、その恋がもはや幸せな意味において叶わないことを知ると、せめて〈あはれ〉だけでも、と、彼女からの〈あはれ〉を求めるようになった。しかし、結局、彼はその〈あはれ〉さえも手に入れることが出来ず、しかも皮肉なことに、彼女以外の人間は、彼に惜しみない〈あはれ〉を授けるのだった。彼は一番欲しかったものを最後まで手に入れることが出来なかった。そのひとかけらでさえも、彼は手に入れることが出来なかった。それこそが彼の悲劇だった。その意味では、彼は〈恋〉に死ななかった。彼は〈あはれ〉に死んだのである。

注

（1）石田穣二「柏木の巻について」（『源氏物語論集』昭和四六年、桜楓社）

（2）諸本によってその数は前後するが、たとえば藍美喜子「源氏物語における「あはれ」の偏在」（『国語語彙史の研究　九』昭和六三年、和泉書院）における調査によると、池田亀鑑『源氏物語大成』の本文では一〇三二例を数えるという。

（3）たとえば、庄司米蔵、西下経一、盛岡常夫、村井順など、特に一九四〇年代にその研究が多く、第二次世界大戦下の発表であるという状況を多少は勘案すべきであろうが（ただし、庄司米蔵の論考は一九二七年発表、村井順の論考は一九四七年発表である）、〈あはれ〉そのものの複雑微妙さは十分に理解されうる論考となっていよう。なお、最近の研究としてそのような〈あはれ〉の意義を追究したものは少なく、あるとしても多くが「もののあはれ」の分析である。

（4）以下、『源氏物語』の本文引用は小学館『新編日本古典文学全集　源氏物語』による。算用数字は巻数を、漢数字は引用したページ数を示す。

（5）鈴木日出男「『源氏物語』の和歌的方法」（『古代和歌史論』平成二年、東京大学出版会）

（6）鈴木宏子「柏木の物語と引歌」（『古今和歌集表現論』平成一二年、笠間書院）

（7）三枝秀彰「「かひなきあはれ」―竹取による柏木の造型―」（『源氏物語の時空』平成九年、笠間書院）

（8）高田祐彦「身のはての想像力―柏木論の断章―」（『日本文学』43－6号、平成六年六月）

（9）『古今和歌集』恋二の六〇三番歌、清原深養父の「恋ひ死なばたが名はたゝじ世の中の常なき物といひはなすとも」（引用は岩波文庫による）を引いているのである。

(10) 小島繁一「源氏物語　禁忌侵犯の回避とその表現―「あはれとだにのたまはせよ」をめぐって―」(『同志社国文学』22号、昭和五八年三月)

(11) 池田和臣「引用表現と構造連関をめぐって―源氏物語第三部の表現構造―」(『源氏物語の探究　第七輯』昭和五七年、風間書房)

(12) 前掲(6)の論文より引用。

(13) 前掲(10)の論文より引用。

(14) 前掲(7)の論文より引用。

(15) 朴光華「『源氏物語』柏木の死について―「あはれとだにのたまはせよ」を中心に―」(『日本仏教文化論叢・下』平成一〇年、永田文昌堂)

(16) 野村精一「若菜巻試論―人間関係の悲劇的構造について」(『源氏物語の創造』昭和四四年、桜楓社)

(いしやまたかひろ／神戸大学大学院生)